

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	医学総論			担当講師	酒井 聖子		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	この講義では、言語聴覚療法に関わる疾病予防、生命の延長、身体的・精神的機能の増進をはかる科学・技術についての知識を学ぶ。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康・疾病・障害と社会環境を理解する 2. 医の倫理を理解する 3. 医療行為を理解する 4. 人口・保健統計を理解する 5. 疫学について理解する 6. 医療安全と感染予防を理解する 7. 健康管理、予防医学（母子保健、成人・老人保健、精神保健、環境保健含む）を理解する 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	医学総論オリエンテーション						
2	人口の動向						
3	妊娠・出産と胎児の保健						
4	新生児・乳幼児期の保健（母子保健）						
5	青少年の保健（学校保健）						
6	成人期の保健						
7	老年期の保健						
8	心の健康と心身障害						
9	環境衛生（生活環境の保全）						
10	環境汚染と公害						
11	感染症とその予防						
12	食物と健康（食品保健）						
13	職業生活と健康（産業保健）						
14	保健・医療の行政						
15	国際保健、まとめ						
評価方法	終講試験（100%）						
教科書	社会・環境と健康 公衆衛生学(2024年版)			医歯薬出版			
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	解剖学			担当講師	長戸 康和		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	4 単位	時 間	60 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	人体の形態、構造、機能、科学組成などを相互に関連させて提示し、それらを動的に理解把握させるとともに言語聴覚士にとって必須の項目を指摘して卒前卒後の学習に役立つ内容とする。						
到達目標	1. 骨に関する形態・構造・機能について説明できる。 2. 筋に関する形態・構造・機能について説明できる。 3. 消化器系に関する形態・構造・機能について説明できる。 4. 呼吸器系に関する形態・構造・機能について説明できる。 5. 泌尿生殖器系に関する形態・構造・機能について説明できる。 6. 内分泌系に関する形態・構造・機能について説明できる。 7. 神経系に関する形態・構造・機能について説明できる。 8. 言語聴覚士として必要な器官、部位の形態学的基礎知識を説明できる。 9. 言語聴覚士が知っておかなければならない基礎・臨床医学的事項を説明できる。						

回	授 業 計 画 ・ 内 容	
1	直立する人体：	直立二足歩行への道のり
2	構成要素から見たヒトの身体：	細胞から組織、そして器官へ
3	形成過程から見たヒトの身体：	受精卵から胚葉の分化・器官形成
4	運動(随意運動)のための器官：	(1) 骨と骨格・関節
5		(2) 骨格筋の構造と機能
6	身体を構成する運動器官：	(1) 体幹の骨格と筋
7		(2) 頭蓋骨の構成と頭部の筋
8		(3) 口腔・咽頭の構成と頸部の筋
9		(4) 上肢の骨格と筋
10		(5) 下肢の骨格と筋
11	知覚情報と運動機能の統合器官系：	神経系(1) 神経系の基礎知識
12		神経系(2) 中枢神経
13		神経系(3) 末梢神経系：体性神経系
14		神経系(4) 末梢神経系：自律神経系
15	中間試験（1～14まで） カラースケッチ提出（1～41）	
16	随意運動のための情報入力器官：	(1) 視覚のための器官
17		(2) 聴覚と平衡覚のための器官
18	生命活動を支える器官系：	循環器・消化器・呼吸器・泌尿器
19	循環器の構成：	(1) 心臓(主として構造について)
20		(2) 全身に広がる動脈と静脈・リンパ管
21	呼吸器の構成：	(1) 気道：鼻腔・副鼻腔・喉頭・気管と気管支
22		(2) 呼吸部：肺
23	消化器の構成：	(1) 消化管と消化腺
24		(2) 頭頸部・胸部：口腔から咽頭・食道
25		(3) 腹部消化器：胃と小腸・大腸

26	(4) 腹部の消化腺：肝臓と膵臓
27	泌尿器官の構成： 尿の生成と排泄のために、腎臓・膀胱・尿道
28	生殖器官の構成： 有性生殖のための器官系
29	恒常性の維持のための器官： 自律神経系・内分泌および免疫器官(臨床生理学に続く)
30	終講試験(16～29まで) カラースケッチ提出(42～93)
評価方法	出席率(5%)、筆記試験(中間試験(35%) / 終講試験(35%))、カラースケッチ(25%)
教科書	PT・OT・STのための解剖学 廣川書店 カラースケッチ解剖学 廣川書店
参考書	
備考	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	生理学			担当講師	長戸康和		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	生命現象を科学席視点で捉えるために、生体機能発現における神経系の役割と神経細胞や筋細胞の機能の発現の仕組みを理解する。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 血液・体液の生理学的機能について説明出来る。 2. 循環器系の生理学的機能について説明出来る。 3. 呼吸器系の生理学的機能について説明出来る。 4. 内分泌系の生理学的機能について説明出来る。 5. エネルギー代謝の生理学的機能について説明出来る。 6. 消化・吸収の生理学的機能について説明出来る。 7. 排泄の生理学的機能について説明出来る。 8. 生殖・発生の生理学的機能について説明出来る。 9. 脳機能と視覚・聴覚の関連について説明出来る。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	構造と機能の基礎知識 生命維持のための基本システムとは						
2	恒常性の維持と体液バランス（1） 血液循環のしくみとその調整						
3	恒常性の維持と体液バランス（1）：続き 血液循環のしくみとその調整						
4	恒常性の維持と体液バランス（2） 体液と血液：造血器官と血球						
5	恒常性の維持と体液バランス（3） 呼吸とその調整システム						
6	恒常性の維持と体液バランス（4） 腎臓の機能と尿の生成						
7	恒常性の維持と体液バランス（5） 体液調節と体温調節						
8	生命活動を支える仕組み（1） 食事と生体機能：味覚と嗅覚・摂食機能とその障害						
9	生命活動を支える仕組み（2） 脳機能と身体（1）：「見る」こと						
10	生命活動を支える仕組み（3） 脳機能と身体（2）：「聞く」こと 「話す」こと						
11	生命活動を支える仕組み（1） 睡眠：ヒトはなぜ眠るか						
12	生命活動の調整（1） 自律神経とホルモンによる調整						
13	生命活動の調整（2） 生殖機能を調整するホルモン						
14	生命活動の調整（3） 生体の防御システム：自然免疫と獲得免疫						
15	終講試験						
評価方法	出席率(5%)、筆記試験(中間試験(40%) / 終講試験(40%))、カラスケッチ(15%)						
教科書	やさしい生理学 南江堂 カラスケッチ解剖学 廣川書店						

参考書	
備考	

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	病理学			担当講師	日高 輝久		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	<p>疾病の原因、成り立ち、生体反応などの知識を通して、より科学的に疾病を理解し、より効果的な治療や予防を考えることができる方策を身につける。さらに最近の病理学は微細解剖学、分子生物学、遺伝学、免疫学などの分野からも検討されるようになり大きく発展しているので、それらの観点を踏まえた病理学が把握できるようにする。</p>						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 古代の医学がどのようにして近代病理学に分化・発展してきたかを説明できる。 2. すべての疾患は何らかの原因をもとに発生することを説明できる。 3. 病因にはどんな内因と外因があるかを、それぞれ関連疾患名をあげて説明できる。 4. 退行性病変に属する細胞・組織の変性、萎縮、壊死について説明できる。 5. 生命維持に重要な物質代謝が異常を起こすと、どんな疾患を引き起こすかを説明できる。 6. 細胞・組織の再生、化生、肥大、過形成の病的意義や創傷の治癒過程を組織学的に説明できる。 7. 循環障害によって引き起こされる各種重要疾患を病理学的に説明できる。 8. 免疫現象は異物に対する生体防御反応であるが、自己を攻撃することもあることを説明できる。 9. 生体防御に炎症反応が関与するが、それらの現象を代表的な疾患を例に挙げて説明できる。 10. 感染症は病原体と宿主の力関係で決まるが、その病原体の種類と主な疾患を説明できる。 11. 腫瘍は細胞の自律的増殖であるが、増殖の仕方によって良性腫瘍か悪性腫瘍になることを説明できる。 12. 腫瘍とがんを区別でき、がんの死亡率の推移や生活習慣も発ガンの原因になることを病理学的に説明できる。 13. 放射線は生体に病的な影響を与える一方で、診断にも利用されていることを病理学的に説明できる。 14. 老化、加齢、寿命の定義を説明でき、老化によって現れる各種臓器の変化を病理学的に説明できる。 15. 奇形の発生原因や疾患の遺伝的しくみを説明でき、関連する主な疾患名を挙げるができる。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	病因						
2	先天異常①						
3	先天異常②						
4	循環器						
5	炎症						
6	感染①						
7	感染②						
8	免疫①						
9	免疫②						
10	アレルギー①						
11	アレルギー②						
12	進行・退行変性						
13	腫瘍						
14	まとめ①						
15	まとめ②						
評価方法	終講試験（100%）						
教科書	標準理学療法学・作業療法学 病理学 医学書院						
参考書							

備考	
----	--

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	内科学			担当講師	辻 正富		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	<p>PT・OT・STの仕事円滑に行うためには、常にその対象である人の全身的な病態を正確に把握しておかねばならない。基本的に、代表的な病態の概略を理解してほしい。</p>						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体活動は、環境因子も含めた多彩な外来性攻 因子に晒されており、そのぶつかり合いの過程で生じるバランスの崩れが疾病として発現につながる。その際、生体が営んでいる摂食、様々な労働作業、休養などいわゆる生活習慣が、その病態の発現と進展や抑制に大きく関わっていることをまず理解してほしい。 2. 疾病を持ったヒトがどのような悩みや症状を持つかを判断できるようになってほしい。 3. 疾病によって起こる活動性の低下やその程度をどのようにして判断するかも理解してほしい。 4. 疾病の経過中にどのような容態の変化が起こりえるかも理解していただければ、リハビリテーションの計画、立案や実行に役立つであろう。 5. 高齢者の増加に対し、健康寿命の延長、フレイルの予防の観点からも各種疾患・病態を理解してほしい。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	循環器疾患						
2	高血圧疾患						
3	消化器疾患						
4	消化器疾患						
5	肝疾患、胆のう疾患						
6	大腸疾患、血液疾患						
7	血液疾患						
8	代謝						
9	糖尿病						
10	糖尿病						
11	メタボリック症候群、高尿酸血症						
12	内分泌疾患						
13	腎疾患						
14	呼吸器疾患						
15	膠原病						
評価方法	定期試験（100%）						
教科書	標準理学療法学・作業療法学 内科学 医学書院						
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	精神医学			担当講師	日高輝久		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	精神疾患の種類・概要、評価・治療、リハビリテーション職種との関連を学ぶ。						
到達目標	1. 精神疾患の分類と基本的概念の理解 2. 法的手続きの実際 3. 統合失調症患者の理解と対応 4. 躁うつ病、神経症患者の理解と対応 5. 言語化困難な患者（疾患）の理解と対応 6. 治療論（どのような治療がなされているかの理解と応用） 7. 言語聴覚士における音楽療法の実際 8. テストに対する技能の習得						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	精神疾患の分類 ショートスピーチトレーニング						
2	精神衛生学（精神保健）						
3	疾病分類, 面接基準						
4	精神医学的検査						
5	精神障害の治療法（1）：薬物療法, 精神療法						
6	精神障害の治療法（2）：社会復帰療法, リハビリテーション						
7	臨床心理学の基礎：ライフサイクルからみた基本的な精神発達						
8	法的変遷とその理解 T E G と自己分析						
9	各論（統合失調症） コミュニケーション理論						
10	各論（躁うつ病/神経症 他） 行動療法						
11	各論（認知症/発達障害学） 総論のまとめ						
12	治療者・患者関係：患者さんとどう接するか						
13	治療論 コラージュ療法						
14	音楽療法						
15	終講試験						
評価方法	終講試験（100%）						
教科書	（指定教科書なし）						
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目		<input type="checkbox"/>	
科目名	形成外科学			担当講師	西尾康二、岡崎宏、稲川良、松本典之、高堀雅子、根本皇太		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	1 単位	時 間	16 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	言語障害を発生する顔面の外傷、疾病を中心に創傷の治癒という問題を掘り下げて考える。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 創傷の治癒過程について理解できる。 2. 皮膚形成術について理解できる。 3. 植皮について理解できる。 4. ケロイドについて理解できる。 5. 熱傷について理解できる。 6. 顔面神経麻痺について理解できる。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	顔面の形成外科学						
2	口唇口蓋裂とその治療						
3	口唇・口蓋裂						
4	褥瘡、熱傷、顔面神経麻痺						
5	頭蓋、顔面の先天異常						
6	頭頸部手術に伴う障害						
7	言語聴覚療法に関する形成外科学						
8	まとめ						
評価方法	終講試験(100%)						
教科書	講義資料を参照						
参考書							
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	聴覚医学			担当講師	岡崎宏		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	聴覚器官の構造・機能など、基礎的事項について理解を深める。聴覚障害の病態生理を十分に理解し、検査やリハビリテーションなどについて言語聴覚士として必要な知識を身につける。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外耳・中耳の構造について説明できる。 2. 内耳、聴覚路、聴覚中枢の構造について説明できる。 3. 集音機構、中耳伝音機構について説明できる。 4. 内耳感音機構、聴覚路・聴覚中枢の機構について説明できる。 5. 聴覚の病態、原因と発症時期などについて説明できる。 6. 奇形、異物、外傷、中耳炎、耳硬化症など主要な外耳・中耳疾患について説明できる。 7. メニエール病、老人性難聴、聴神経腫瘍、皮質性難聴など主要な内耳・後迷路疾患について説明できる。 8. 聴覚障害の治療を理解する。 9. 小児の難聴を理解する。 10. 検査機器の使用法を理解する。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	耳の発生と異常						
2	耳の解剖：外耳・中耳						
3	耳の解剖：内耳						
4	耳の生理：聴覚生理						
5	耳の生理：体平衡の生理						
6	耳疾患の一般症状						
7	難聴1						
8	難聴2						
9	外耳疾患						
10	中耳疾患						
11	内耳疾患						
12	後迷路性・中枢性疾患						
13	乳幼児の難聴						
14	耳の検査法						
15	終講試験						
評価方法	終講試験100%						
教科書	病気が見える⑬ 耳鼻咽喉科						
参考書	STEP 耳鼻咽喉科 海馬書房 新耳鼻咽喉科学 南山堂						
備 考	講義資料と教科書を読み、予習復習を行うこと。						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	言語医学			担当講師	西尾康二、田中眞一		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	<p>言語聴覚士の扱う障害に医学的根拠をあたえる科目である。 言語に関する構造、機能を解剖学、生理学の基礎から理解し、言語医学の基盤に基づいてコミュニケーション障害の病態に対する基本的な概念を形成する。言語的活動の理解に資するため、それを広く取り巻く脳神経活動を包括的に理解する。認知・神経科学の基礎となる中枢神経系の構造・生理学的知見を学ぶ。あわせて基本的な高次脳機能障害についても学ぶ。</p>						
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・発話の神経運動支配を知る ・脳神経を知る ①言語と聴覚のための脳神経を理解する ・脳神経を知る ②脳神経の役割を理解する ・言語中枢メカニズムとその障害を知る ・基本的な高次脳機能障害を知る ・班発表で役割を分担できる 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	オリエンテーション						
2	発話の神経運動支配						
3	脳神経 言語と聴覚のための脳神経						
4	上位運動ニューロン障害						
5	下位運動ニューロン障害						
6	言語中枢メカニズムとその障害①						
7	言語中枢メカニズムとその障害②						
8	言語中枢メカニズムとその障害③						
9	言語中枢メカニズムとその障害④						
10	言語中枢メカニズムとその障害⑤						
11	言語と聴覚の脳神経						
12	言語中枢						
13	発話の運動神経						
14	発話の運動神経						
15	終講試験						
評価方法	終講試験50%、班発表課題50%に基づいて学修成果を判定する						
教科書	病気が見える Vol.7 脳・神経 メディックメディア						
参考書	プリントを適宜配布						
備 考	教科書を読みながら進めていくが事前によく教科書を読み理解しておくことが必要である。発表準備を班ごとに十分しておくこと。						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	臨床心理学			担当講師	浮谷秀一		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	人間を理解する方法を知ること。各種心理検査を知り、自分の性格特性を知る。カウンセリングの基礎的知識を知る。各種心理療法を学ぶ。軽度発達障害について学習をする。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床心理学に興味を持つ。人間を理解する方法を知ること。 2. 各種心理検査の分類と内容の説明ができる。 3. 自分の性格を知る。Y-G性格検査の説明ができる。 4. 自分の性格を知る。エゴグラムの説明ができる。 5. 投影法について説明ができる。ロールシャッハテストやTATの説明ができる。 6. フロイト派の考え方の説明ができる。 7. 描画法、バウムテストの説明ができる。 8. ロジャース派の説明ができる。 9. 聴くことの意味、コミュニケーションの方法について説明できる。 10. ブリーフセラピーの考え方を説明できる。 11. ユング派の説明ができる。 12. 各種心理療法の説明ができる。 13. 言語を使わないでコミュニケーションすることの大切さを知る。 14. 軽度発達障害について説明できる。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	ガイダンス、心理学とは						
2	1. 適応心理 (1) 欲求とは (2) 欲求不満						
3	(3) 葛藤 (4) 適応機制						
4	2. 臨床心理学 臨床心理学とは						
5	3. コミュニケーション パーバルとノンパーバル						
6	感情伝達実験						
7	音声伝達実験						
8	音声伝達実験						
9	4. 臨床的介入 (1) 精神分析 (2) 来談者心療法						
10	(3) 行動療法						
11	5. 臨床的アセスメント (1) 観察法 (2) 面接法 (3) 検査法						
12	矢田部ギルフォード性格検査実習						
13	1) 質問紙法、TEG実習						
14	2) 作業検査法 3) 投映法						
15	終講試験						
評価方法	終講試験（100％）						
教科書	（指定教科書なし）						
参考書							
備 考	随時、講義者の作成したプリントを配布する。色鉛筆又はクーピーを用意しておくとう便利です。						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	生涯発達心理学			担当講師	小幡 知史		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	後期
概 要	<p>人を対象として支援を行う対人援助職者は、様々な年代の人との関わりを求められることが多い。そのため、相手のライフステージの特徴や課題などを知っておくことが望ましい。また場合によっては、そういった人（特に子ども）の発達の手助けをすることも求められる。本講義では、対人援助職者が知っておくべき人の発達についての基礎的な知識を学び、自身の実践に役立てることができるようになることを目指す。</p>						
到達目標	<p>人が生涯にわたってどのように発達していくのかを概観し、人の発達について”広く浅く”理解することである。そのために、人の発生から死まで、すなわち胎児期から老年期までの発達の概要を説明する。さらに、それぞれのライフステージにおいてどのような発達の特徴や課題があるのかについても説明する。</p>						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	生涯発達心理学とは						
2	発達の規定因、発達段階、発達課題						
3	生涯発達心理学の研究法						
4	胎児期、乳児期						
5	幼児期						
6	児童期						
7	道徳性と三歳児神話						
8	青年期前期						
9	青年期中期・後期						
10	成人期前期						
11	成人期中期（中年期）						
12	成人期後期（老年期）						
13	発達理論のまとめと近年の動向①						
14	発達理論のまとめと近年の動向②						
15	終講試験						
評価方法	終講試験（100%）						
教科書	（指定教科書なし）						
参考書							
備 考	積極的な態度で授業に臨むこと。リアクションペーパーも堅実に取り組むこと。						

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	言語学			担当講師	菅良介		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	言語学とはどのようなことを研究する分野であるのかを理解する。音声言語が持っている一般的な特徴を知り、音論・形態論・文法論・意味論・語用論の各領域における基本的事項を理解する。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 言語学とはどのような学問か、理解できる。 2. 言語の音韻論的側面を理解できる。 3. 意味論・語用論とは何か、概要を理解できる。 4. 言語の文法構造（主に日本語）とは何か、概要を理解できる。 5. 形態論とは何か、概要を理解できる。 6. 人間以外の動物におけるコミュニケーションを学び、人間のコミュニケーションとの違いを理解できる。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	言語とは何か						
2	言語の性質						
3	ソシユールの言語学						
4	音韻論						
5	形態論						
6	文法論						
7	言語学の様々な理論						
8	中間試験・まとめ①						
9	構成素分析・生成文法						
10	意味論						
11	語用論						
12	語と語の意味関係						
13	類義語、多義語、文字表記						
14	方言・社会言語学						
15	終講試験・まとめ②						
評価方法	終講試験50%、中間試験30%、課題10%、出席・受講態度等10%に基づいて学修成果を判定する						
教科書	言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学						
参考書	よくわかる言語学入門—解説と演習（日本語教師トレーニングマニュアル）						
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	音声学			担当講師	菅良介		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験			
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	この講義では音声学と音韻論、構音法の基礎的な理論を理解しながら、言語聴覚士として必要な音声言語の訓練法を学んでいく。						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本語の音声について理解することができる。 2. 日本語音声の構音法と口腔器官のメカニズムについて理解することができる。 3. 母音の分類と構音法について理解することができる。 4. 子音の分類と構音法について理解することができる。 5. IPAによる構音標記について理解することができる。 6. 音節とモーラについて理解することができる。 7. 日本語のアクセントについて理解することができる。 8. 日本語のイントネーションについて理解することができる。 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	音声の基本的な性質、発声の仕組み						
2	音声器官と調音点・調音方法、音声記号の記述方法と国際音声記号(IPA)						
3	母音と母音の分類基準						
4	子音の分類基準、子音①：破裂音						
5	子音②：鼻音、ふるえ音、弾き音						
6	子音③：摩擦音、側面摩擦音						
7	子音④：接近音、側面接近音、その他の記号、副次調音						
8	中間試験・まとめ①						
9	音声と音韻、音節とモーラ						
10	音源、いろいろな音声現象						
11	リズム、聞こえ度						
12	アクセント						
13	イントネーション						
14	音声(音)を目で見る						
15	終講試験・まとめ②						
評価方法	終講試験50%、中間試験30%、課題10%、出席・受講態度等10%に基づいて学修成果を判定する						
教科書	言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学						
参考書	日本語音声学入門、日本語の音声入門—解説と演習（日本語教師トレーニングマニュアル）						
備 考							

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>
科目名	言語学・音声学演習			担当講師	加藤俊彦
分野	専門基礎	授業方法	講義・演習	実務経験	言語聴覚士としての実務経験
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次 学 期 後期
概 要	音声学・言語学の基礎的知識を生かし、言語聴覚療法における言語症状の分析を試みるための考え方を学ぶ。				
到達目標	1. 国際音声記号を用いた発話内容の表記方法を理解する 2. 音韻論、形態論、統語論の視点から、発話内容を分析する方法を理解する				
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	音韻論の視点による分析（成人領域）①				
2	音韻論の視点による分析（成人領域）②				
3	音韻論の視点による分析（小児領域）①				
4	音韻論の視点による分析（小児領域）②				
5	形態論の視点による分析（成人領域）①				
6	形態論の視点による分析（成人領域）②				
7	形態論の視点による分析（小児領域）①				
8	形態論の視点による分析（小児領域）②				
9	統語論の視点による分析（成人領域）①				
10	統語論の視点による分析（成人領域）②				
11	統語論の視点による分析（小児領域）①				
12	統語論の視点による分析（小児領域）②				
13	症例検討①				
14	症例検討②				
15	終講試験				
評価方法	終講試験80%、課題10%、出席・受講態度等10%に基づいて学修成果を判定する				
教科書	適宜資料を配布				
参考書					
備 考					

2025年度 講義要項（授業計画）

				実務経験のある教員等による授業科目	<input type="checkbox"/>		
科目名	言語発達学			担当講師	石井汰樹		
分野	専門基礎	授業方法	講義	実務経験	言語聴覚士としての実務経験		
単位数	2 単位	時 間	30 時間	学 年	1年次	学 期	前期
概 要	<p>「ことば」はヒトの成長・発達の過程においてどのように獲得され、習得するようになったのかを理解する。また、代表的な言語発達理論やことばの障害、障害受容についても学ぶ。</p>						
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 言語発達を説明する理論の理解ができる 2. 子どもが迎えるそれぞれの時期での言語発達の理解を深める 3. 語彙や構文、談話や音韻意識、読み書きなどのそれぞれの意味や発達の仕方を理解する 						
回	授 業 計 画 ・ 内 容						
1	ガイダンス・言語発達学総論						
2	言語発達と説明する理論						
3	前言語期の発達 1						
4	前言語期の発達 2 言語獲得期の発達 1						
5	言語獲得期の発達 2						
6	言語獲得期までの発達について確認						
7	幼児期の言語発達 1						
8	幼児期の言語発達 2						
9	幼児期の言語発達 3						
10	幼児期の言語発達 4						
11	中間試験						
12	中間試験解説						
13	総復習・グループワーク						
14	グループワーク 2						
15	終講試験						
評価方法	終講試験(100%)						
教科書	言語発達障害学 医学書院						
参考書	ドリルプラス 言語発達障害						
備 考	講義資料と教科書・参考書を読み、予習復習を行うこと						